

序文

2022 年度全国調査報告書が完成しましたので、皆様にお届け致します。

2022 年度はオミクロン株となって感染性が高まり非常に多く感染者が出ましたが、他方で対応するワクチンや抗体療法も普及し、ようやく新型コロナも克服されつつあります。その証拠に 2023 年 2 月 10～12 日に開催させていただいた第 45 回日本造血・免疫細胞療法学会総会は 2100 名もの現地参加があり、たいへん盛会裏に終了することが出来ました。対面で講演を聞いたり、議論し合う喜びを味わって頂けたことと存じます。

今回お届けするデータは重症化の多かったデルタ株が主流であった時期の移植であり、昨年度まで続いていた移植数の高止まりから、数にして 256 例（4.2%）減少に転じたものとなりました。しかしながらあの医療が逼迫した環境でこの程度の減少で済んだことと、非血縁者間末梢血移植数が過去最大となったことは、全国の医療機関・移植チームの多大なる工夫と努力、そして献身の賜であり、ここに心より感謝申し上げます。さらにその努力を確実にまとめ上げ、非常に分かりやすい形で長年絶え間なくフィードバックしていただいている日本造血細胞移植データセンターの皆様にも深謝致します。2022 年度まで学術総会開始前に行われていたワーキンググループ発表会は来年度より学会総会のプログラムの一つとなります。これを機により多くの会員が質の高い日本造血細胞移植データセンターの膨大なデータを解析し、その結果を学会員とシェアするだけでなく、国際学会や国際誌に発表し、日本造血細胞移植データセンターの価値観をさらに高められることを祈念します。また免疫細胞療法製剤に関するレジストリが発展し、もう一つの太い柱として育って行くよう関係者が一丸となって努力を続けて行きたいと思えます。

最近、AI を用いた大規模医療データからの情報抽出や活用が注目され、第 45 回日本造血・免疫細胞療法学会総会でもワークショップを設けたところ多くの参加者が来場されました。以下は以前 TRUMP データをとりまとめて入力していた私個人の感想ではありますが、電子カルテに TRUMP 登録した移植患者さんのデータ抽出をアシストしたり、リマインドするようなアプリが超多忙な移植医の負担を減らす時代がいずれ来るかもしれないと想像しております。

最後に、移植ドナーソースが多様化し、PTCY を含めた前処置も定着して参りますと、何がベストであるのかますます選択に悩むことも多いことかと存じます。最新の移植成績を網羅したこの全国調査報告書がそのような場面で、また患者・家族への説明場面で、バイブルとして活躍することは疑う余地もありません（なお本全国調査報告書には、web-only-materials として研究成果一覧も公開されていますので、詳細な情報はこちらをご覧ください）。

今後とも皆様のご支援をどうか宜しくお願い申し上げます。

2023 年 2 月

第 45 回日本造血・免疫細胞療法学会 総会会長

名古屋大学大学院医学系研究科 分子細胞免疫学 特任教授

赤塚 美樹